
継承される運命

黒焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

継承される運命

【Nコード】

N35410

【作者名】

黒焰

【あらすじ】

人に仇なす存在である魔獣と、同じ存在でありながら人と共存して共に生きる守護獣。

そんな2つの存在と人間がいる世界で狩野竜牙は生きていた。

設定（前書き）

継承される運命に関する世界観および設定です。
進行具合に応じて更新の予定。

設定

【世界観】

魔獣と人間、そして魔獣と同じ存在でありながら人間に味方する守護獣が存在する世界。

生活基盤は魔術や守護獣に頼り切られている。

【魔獣】

異世界の魂が具現化した存在。

人に仇なす存在と言われており、その種類は様々。

普段は森など人があまり住み着かないところで生活をしている。

全ての魔獣が人間と敵対しているわけではなく、少数だが友好関係をとる魔獣もいる。

【守護獣】

魔獣と同じ異世界の魂だが人間の精神に宿った存在。

普段は表の世界にこそ出ないが、自身の魔力を使って具現化することが出来る。

また、主となる人間に対して魔力を分け与えて支援する。

【ハンター】

この世界において最も一般的な職業。

魔獣の殲滅から建物の修復作業など、いわゆる何でも屋。

魔獣関連の依頼がほとんどのためその内の8割から9割は守護獣持ち。

【高速移動屋ソニクライトニング】

車などの機械がないこの世界において『乗り物』に関する全てを管理している。

竜牙はここに所属しており、主に殲滅系の依頼でハンターを依頼場まで連れて行くことを仕事にしている。

【華音】

大陸5都市の中で北に位置する町。

雪が有名で別名『雪の街』と呼ばれている。

また、その町にありながら雪の積もらない丘『ものみの丘』も有名。

【養成校】

ハンターとしての技能を磨くための学校。

大陸5都市全てにある。

【ギルド】

ハンターの情報の管理、依頼の受注を行っている場所。
町によって違うが、華音では養成校の寮の1階にある。

【ランク】

ハンターの強さの指標。

年に二度ほど昇格試験があり、それによってランクが上昇する。

高いほうからレジェンド、マスター、ゴールド、シルバー、ブロンズ、S、A、B、C、Dとある。

ただしレジェンドは10年近く前から空席となっている。

養成校ではBが平均で、Sもあればかなり高いほうとされている。

【魔術】

魔獣や守護獣が起こす不思議な現象。

魔力を消費して発動させる。

人間は守護獣から魔力をもらって発動させることができる。

その魔獣、守護獣が持つ属性以外の魔術は発動できない。

【属性】

魔獣や守護獣が持つ特性。

それぞれ利点、欠点のほか相性がある。

基本的には炎、水、雷、風、金、地、光、闇の8つがあり、その他氷などの亜種も存在する。

また、数は極端に少ないが複数の属性が集まっているものや、どの属性の特殊属性も存在するらしい。

【キーカス】

華音がある大陸。

北の華音の他、西の尾根、東の初音、南の絵亜、中央の蔵等が大陸5都市。

この世界で一番人間が存在する大陸とされている。

【二つ名】

一般的にシルバランク以上のハンターに付けられる異名。

その人物の名前は知らなくても二つ名は知っていると云う人も多い。大抵守護獣や戦闘方法で決められる。

竜牙の『月の堕天使』の場合、守護獣であるアルテルムが光と闇の対立する二属性を持つことと、アルテルムの額の三日月形の傷が元になっている。

【MWS】

正式名称マインドワールドシステム。

人間の精神を架空世界へと位置づけて戦闘訓練をすることができる。現実ではないためただけ傷付けられても現実世界には影響しない。その性質からその多くが養成校に設備されている。

【固有魔術】

一般に公表されている魔術に対して、個人、一族が編み出した魔術。

編み出すためには、必ず解析の難しい陣術の構築をしなければならず、さらに一般化されていないため、効率化がされていないので、総じて魔力消費が大きい。

しかしその分、その魔術の情報がないためにかなり意表が突ける。

人物紹介

【狩野竜牙】

この物語の主人公でハンター。

黒を基調とした服装に黒のバンダナを頭につけている。

ランクはAとしているが本来はシルバーランクで二つ名は『月の墮天使』。

本来のランクだと色々と騒動になりやすいので偽っている。

守護獣は漆黒の西洋竜アルテルム。

武器は血呪と爆癒の二刀。

高速移動屋ソニックライトニングに所属しており、空の移動では2番目に速い。

基本的に面倒くさがりで大雑把。

能力、アサルターブレインによって武器を扱う武術による技術は、既に限界に陥っている。

その昔、アルテルムと守護獣契約をした際にその呪われた力を受け継いだ。

そのおかげで身体能力の向上、守護獣ができたことによる魔術の使用が可能になったことなど戦略の幅が広がった。

その代わりにデメリットとして、常に付きまとう破壊の衝動に耐えている。

暇なときは鍛錬が寝ている。

ある秘密があるらしい。

竜牙の能力

【アサルターブレイン】

どのような武器でも持つだけで一人前レベルで扱うことができる。

その代わりにどこまで鍛えても技術が向上することはない。

【呪われた血の力】

過去より続く呪われた力。

それを受け継ぎし者は身体的、魔術的にも通常の数倍の力を得る。その代わりに常に破壊の衝動を精神に受け続けることになる。

その末路は暴走による自身の崩壊のみ。

竜牙は部分的に開放することでその影響を最小限に抑えているが、普通より弱いながらも常に破壊の衝動を受けていることに変わりはない。

竜牙の使う武器

【血呪】

酸化した血のように赤黒い色の刀身をした刀。

使用者を傷付ける代わりに血の刃を放つ能力を持つ。

その威力は使用者に与える傷の度合いに比例する。

【爆癒】

白銀の刀。

対象の傷を癒すヒールの能力がある他、爆発を起こす能力を持つ。

【月夜】

竜牙が血の力を使ったときのみ取り出す巨大な漆黒の大剣。

耐久力は竜牙の持つ武器の中でも最強を誇る。

通常時でも使えないわけではないが、その巨大さ故に重量がかなりあり、振り回されることも少ないため、あまり使われることはない。

竜牙の使う魔術

【ダークネスデュサピュレス】

属性：闇

一筋の黒いレーザーを放つ。
それに触れたものをその部分が消失する。

【ダークネスワールド】

属性：闇

黒き不可視の霧を発生させる。

範囲は半径50mほど。

【ダークホール】

属性：闇

黒い穴を発生させる。

穴の先は光もない無の世界である。

技量次第では別の場所にもうひとつ発生させて、穴を通ったものをそのまま返すことができる。

【瞬光】

属性：光

短距離なら最強とも言われている移動魔術。

人が認識できないほどのスピードで移動する。

制御が難しく、ほとんどが離脱用として使われているが、制御さえできればかなり使い勝手はいい。

【旋刃】

純粹な技。

二刀流状態で体の軸を中心とし、全方位に対する斬撃を繰り出す。

【インタラプションダーク】

属性：闇

竜牙の固有魔術。

通称『遮断の闇』。

闇を結界のように覆い、内と外の情報を一切遮断する。

【エクスキューショナーズ・ジャステイス】

属性：光&闇

竜牙の固有魔術。

始めに対象を金縛りのようにして拘束。

その後、動けない相手に対して地中から出現させた魔剣で串刺しにする。

【イノセントノヴァ】

属性：光

巨大な光の光線を放つ。

防御、補助に特化している光魔術に珍しく攻撃力が高い。

竜牙の守護獣

【アルテルム】

属性：光・闇

幻獣種竜族の西洋竜タイプの守護獣。

全身漆黒の竜であり、額に三日月型の傷がある。

属性は光と闇という対立する二つ。

なかなかの苦勞人気質。

【能美クドリヤフカ】

竜牙の同級生。

愛称はクド。

初登場時のランクはD。

竜牙に訓練相手にと要請し、その後弟子となった。

竜牙の訓練の甲斐もあり現在はC。

親の影響で色々な土地を転々としている。

1年の冬に実家のある少破へと引っ越した。

元作品：リトルバスターズ

クドの使う武器

【クロスグラビティ】

二刀一対の短剣。

竜牙がダンジョンで入手した武器で、攻撃を加えることに対象の重量が増す能力を持っている。

クドの使う魔術

【スイクルウィンド】

属性：風

無数の真空波を全方位に放出する。

【エアブラスト】

属性：風

突風を発生させる。

威力が高ければ、人を飛ばすこともできる。

【疾風】

属性：風

移動速度強化の魔術。

【スカイダンシング】

属性：風

クドが編み出した固有魔術。

空中に大気を圧縮させた足場を作る。

クドの守護獣

【ヴェルカ&ストレルカ】

属性：風

基本一人一体の守護獣に珍しく、二体ペアの守護獣。
黒く小さいスピード型の犬がヴェルカ。
パワー型の大型犬がストレルカ。
守護獣全体から見るとそれほど力は高くはないが、連携能力は凄まじいものがある。

【黒崎真吾】

華音ギルドの管理人。
ハンターではない模様。

【北川潤】

竜牙と同じ年であり、同級生。
寮での部屋は隣。

ギャグに対して驚異的な回復力を持つ。

ランクはC。

元作品：k a n o n

【水瀬名雪】

竜牙の同級生。

ランクはB。

寝坊の常習者のようである。

母はゴールドランクの水瀬秋子。

元作品：k a n o n

【水瀬秋子】

名雪の母であり、華音校の校長でもある。
ランクはゴールドであり、二つ名は『蒼の女神』。

元作品：k a n o n

秋子の使った魔術

【バブルスプラッシュ】

属性：水

巨大な泡を大量に放出する。

【美坂香里】

竜牙の同級生。

ランクはA。

名雪とは親友の仲。

元作品：k a n o n

【朱鷺戸あや】

少破校の数少ないハンターの一人。

以前、『月の墮天使』としての竜牙と共に戦ったことがある。

プロローグ

「ここか……」

雪の街、華音に降り立った一人の青年。

全身黒尽くめで頭に黒のバンダナをしている。

隣には漆黒の竜。

「本当は俺が来るはずじゃなかったんだけどな」

そういつてその青年は苦笑した。

「……一年中飛び回ってる俺が言う台詞じゃないな」

彼は高速移動屋所属のハンター。

依頼のたびに飛び回る彼には決まった場所はない。

とりあえず実家はあるが自分から帰る事はない。

家族は別として他の者が毛嫌いしているのだから。

そんな彼がこの華音に來たのは親からの要請。

「ったく……。なんもん馬鹿連中にやらせればいいだけだろ」

「そう言うな。武もお前を氣遣ってくれてるんだ」

「……ま、いいがな」

青年は面倒くさがりながらも竜の言葉に頷く。

「さて、いくか」

そついうと彼は歩き出す。

自分の所属するソニックライトニング、そしてギルドへ……。

運命は誰も知らない。

彼は狩野竜牙。

連れ立つ漆黒の竜は守護獣アルテルム。

華音養成校に入学する1年である。

ソニックライトニング

ジリリリリリリッ……

カチッ

「……眠い」

俺は狩野竜牙。

ハンターってのをやっている。

ハンターが何かってのは設定のほうを見てくれ。

「……何いってんだ俺？」

なんか電波が入ったような……。

まあいいか。

「おう、竜牙。相変わらず起きるの遅いな」

こいつは華音ギルドの管理人 黒崎 真吾。

ここのギルドは2階に俺の所属する高速移動屋『ソニックライトニング』があり、それ以上の階は華音校の寮になっている。

「ん？ 今何時だ？」

「12時だ」

まあいつもより少し遅い程度か。

「お前明日から学校だろ。……それで大丈夫なのか？」

「まあなんとかなるだろ」

とりあえず実力は問題ないし。

「まあいいけどな。それより仕事入ってるぞ」

「どういうのだ？」

「3時から依頼場への移動、支援だ。ちなみにBランク」

Bか……まあそれならいいだろ。暇してたところだし。

「おっけ。それ受けるぞ」

「了解。ここ集合だからな」

「もう少し寝るから来たら起こしてくれ」

「……まだ寝るのかよ」

別にやることないからいいじゃねえかよ。

「おう竜牙」

「ん？ 北川か」

こいつは北川潤。

俺と同じ華音校の新入生で俺の隣の部屋だ。

ちなみにCランク。

まあ俺が高すぎるだけだが。

「ちよつと訓練に付き合ってくれないか？」

「悪いな。3時から仕事なんだな」

「そつか。それならしょうがない。頑張ってこいよ」

「ああ」

頑張るほどの仕事でもないけどな。

さて、少し寝ておくか……。

Z Z Z ……。

「——い——きろ——」

眠いつての……。

「つ——く——だか——やな——よ——」

Z Z Z ……。

「——か——い……起きろ——!!」

「はっ!!」

サッ

ズドーンッ

「相変わらず無茶するな」

「お前が起きないのが悪い」

だからって大剣ぶつ放すかよ……。

真吾が金属性だったから部屋直してもらってるが……。

おかげで俺の部屋だけ傷だらけだぞ。

「で、何か用か？」

「だから依頼だって。もう3時だぞ」

む……もうそんな時間か。

1階のギルドに降りると一人の男が座っていた。

「悪い、待たせたか？」

「いや、今来たばかりだ」

それならいいか。

「俺は長谷川秋臣。いつもなら知り合いに頼むんだがちょっと体調が悪くてな」

「俺は俺の仕事をするだけだよ。狩野竜牙だ」

「じゃ早速いくか」

おっと一つ忘れてた。

「俺の料金は基本1割。あとは仕事内容で3割まで増えるがいいか？」

「ああ、確認済みだ」

「それならいい。こい、アルテルム」

俺のそばに黒い西洋竜が具現化して現れる。

こいつが俺の守護獣、黒竜のアルテルム。

額に三日月型の傷があるのが特徴だな。

「よし、いくか」

「あ、ああ……」

アルテルムの力に驚いたか……。

ま、いいけどな。

華音を出て数分後、目的地の街道に着いた。

「速いな」

「一応空の分野では2番目だからな」

1番目は……まあここではいいか。

「で、なんでまた街道の整備なんて依頼があつたんだ？」

普通なら街道は使わない。

魔獣が大量に出現するからだ。

高ランクの魔獣は山やらの人の寄り付かない場所にいるが。

「十坂つて知ってるか？」

「知らん」

こけるなよ……どうせ俺は地理に疎いつつての。

「まあキーカスとは別の大陸の街なんだが……その地主が華音に商品を持ってくるんだ」

「列車は使わないのか？」

列車は金がかかるが街道を進むよりかはかなり安全なはずだが……。

「せつ……その地主の娘が華音によく来ていてな。どうせならゆつくり見ながら来たいだよ」

物好きな奴もいるもんだ。

「それでその地主の依頼がこの街道を整備して危険を少なくしろってことか」

「そういうこと」

しばらくすると魔獣の唸り声が聞こえてきた。

さて……さっそくか。

「んじゃ頑張れ」

「つてお前はやらないのかよ」

「危なくなったら助けてやるさ」

俺がやるとすぐ終わっちまうからな。

「……本当だろうな」

「当たり前だ」

さて、どのくらい力があるのか見させてもらいますか。

あれから出てきた魔獣は秋臣が戦ってる。

……まあたまに俺に向かってくる奴は俺の刀『血呪』でやっているのだが。

ちなみに秋臣の武器は銃。

金属性らしく土を弾に生成して撃っている。

「にしても多すぎだぞこれは!!」

まあBランクの依頼にしてはちょっときついか……。

なかには炎属性の魔獣ケルベロスまでいる。

「アルテルム、加勢してやれ」

「ったく……相変わらず人使いが荒いな」

そういいながらも秋臣に加勢する。

どうでもいいが守護獣なのに『人』使いであってるのか？

ともかくアルテルムが加勢したところでなんとか魔獣の数が減ってきた。

もう少しで終わると思ったその時、山が動いたかのような地鳴りが響いた。

「なんだ!？」

地面からせり上がってくるその存在。

「こいつは…」

それはかなりの防御力を誇る魔獣ゴーレムだった。

こいつは石が意思をもった魔獣で痛覚がないために、一撃で倒すことが必要なため秋臣の銃では少し心許ないか……。

それもかなりの大きさであきらかにBランクの倒せるレベルではなくAランクでも苦戦するかもしれないほど……。

「竜牙」

アルテルムが声を掛けてくる。

もちろん俺は……。

「後は俺に任せろ」

「待て!! いくらお前でもあいつは…」

心配しているようだが俺には無用だ。

「んじゃ、いっちょいきますか」

さて、まずは……。

「爆癒」

「えっ？」

俺のもう一つの刀『爆癒』にはヒールの能力がある。

さっきの魔獣の攻撃で傷ついた秋臣に使った。
まあもう一つの効果のための布石だが。

「いくぞアルテルム」

「おう」

「血牙!!」

血呪の能力の一つ血牙を放つ。

しかしさすがは防御力が自慢のゴーレム……傷一つつかないとはな
……。

なら……。

「ダークネスデュサピユレス」

黒い一筋のレーザーがゴーレムの腕を消失させた。

これなら効くか。

しかしゴーレムはそれをもろともせず攻撃に入る。

アースクエイクス。

地面が揺れ、地割れを引き起こす。

その程度でやられる俺ではないがな。

だがダークネスデュサピユレスで消失させた部分は少ない。

…時間かかるのも面倒だな。

「ダークネスワールド」

俺は魔術を使って黒い霧を発生させ、秋臣を含む全員の視野を隠した。

ズドン!!

「なっ!?!」

大きな音の後、黒い霧が晴れたとき秋臣が見たのは腹にでかい穴の空いたゴーレムだった。

「ったく……。結構疲れるんだぞこれ……」

「面倒だったからな。後で埋め合わせはするさ」

俺はアルテルムに話しかけるがこの程度なら秋臣にいられても大丈夫だろ。

さて、仕上げだ。

「炸裂せよ。爆癒」

次の瞬間、ゴーレムは粉々に碎け散った。

「ま、こんなもんだろ」

ギルドに戻った俺は秋臣から報酬を貰う。

「まあこれだけやれば雪那がきても大丈夫だろ」

聞いたところによるとその地主の娘…雪那というのは彼女らしい。今回の依頼もその関係でその地主から頼まれたものだったようだ。

「んじゃ俺は寝るわ。また今度よろしく」

「あ 待ってくれ」

部屋に上がろうとした俺を秋臣が呼び止めた。

「あの實力… お前、何者だ？」

……まああそこまでやったんだから聞かれるのはしょうがないか。

「俺は……闇そのものだよ」

今、俺に言えるのはこれだけだ。

華音校入学

ジリリリリッ

「ん……朝か……」

そういつて俺は時計を見る。

……8時40分。

確か入学式は50分だった気が……。
で、ここから華音校まで15分。

「寝坊か」

（……なぜそんなに冷静でいられる？）
そりゃもちろん……。

「結局これなんだな……」

「もう暗黙の了解のレベルだろ」

俺はアルテルムを具現化し、ギルドの前にいる。
もちろん乗っていくつもりなんだが。

自分で走っていくより早いし。

「そんな暗黙の了解なんて嫌だ……」

「そっいうな。たかが半月に一回だ」

「なくすということは考えないんだな……」
当たり前だろ。

「さて、いくか……。ん？」

「うっ。入学式早々遅刻だよ」

……俺と同じか。

「アルテルム。あと一人追加な」

「ん？ …… ああそういうことか」

アルテルムは了解したのか俺を乗せて少女のほうに近づく。

「おい、乗ってくか？」

「えっ？」

隣まで追いついたところで声を掛けた。

「華音校の生徒だろ？ 俺もだからついでに乗っけてやるよ」

「うんっ。ありがと」

「わたし水瀬名雪。今年華音校に入学でランクはBだよ」

「俺は狩野竜牙。同じく今年入学でランクはAだ」

アルテルムにつかまりながら自己紹介をする。

…… 水瀬？

「なあ、水瀬って……」

「あつ、お母さんの事知ってるんだね。水瀬秋子『蒼の女神』だよ
やっぱりか……」

華音在住のゴールドランクだから知ってたわけだが。

「着いたぞ」

アルテルムが声をかけた。

…… さすがだな。あと3分。

「一緒のクラスになれるといいね」

アルテルムから降りながら水瀬が言う。

「まあ運しただけだな」

俺と水瀬は急いで入学式へと向かった。

入学式になんとか間に合った俺。

「で、あるからして華音校生としての自覚を持ち……」
それにしてもなんで大体の学校ってこう話が長いかな……。

……寝るか。

（立つたまま寝るのかよ……）

ふっ、寝めるなよ。

（寝めてないんだが）

むっ……まあ寝るか。

「続いて水瀬校長のお話です」

ふう、わたしの番ですか。

こういうのはあまり好きではないんですけどね。

……そういえば名雪はちゃんと来たんでしょうか？

一応朝は起こしたんですがまた寝てないでしょうね。

……ちゃんといましたね。

ただ寝てますけど……。

なんで立つたまま寝れるんでしょうか？

……香里さんが一生懸命起こそうとしてます。

……？

もう一人立つたまま寝てる人がいますね。

名雪以外にそんなことできる人がいるのはびっくりします……。

……一応起きてもらいますか。

「校長の水瀬 秋子です。わたしの話をする前に……」
ここで魔術を構成。

……あれでいいですかね。

「寝ている人は起きてくださいね。バブルスプラッシュ」
パチンッ

「だおっ!？」

名雪のほうは起きましたね。

あと一人は……

そのとき、寝ている彼の前に黒い穴が現れました。

パチンッ

「ぶっ!？　なんだ？」

!？

寝てるのにわたしの魔術に反応した？

それもあれはダークホール？

「ん？　なんだ？」

一応起きてくれましたけど……。

新入生であれだけの实力を持つ人がいるなんて……。

あとで調べてみますか。

今のなんだったんだ？

無意識に反応してしまったが……。

「何をするんだよ、竜牙」

前にいたのは朝俺を起こさなかった北川。

なぜか顔が濡れているが。

「どうしたんだ？　顔濡れてるぞ」

「お前がやったんだろうが。校長が魔術放ったのにお前ダークホールで俺に仕掛けやがって」

……マジで？

(……あとが大変だな)

……ばれてなきやいいけど。

めんどくせえ……。

式が終わり各クラスに振り分けられた教室へきた。

「これから1年間、お前たちの担任をする石橋だ」
担任となる先生の自己紹介。

まあ普通だな。

「それじゃはじから順番に自己紹介してもらおうか」
普通と言えば普通だがめんどくせえ……。

「狩野竜牙。ランクはAでライトニングソニックに所属。よろしく」
ま、このくらいで十分だろ。

他に話すようなこともないし。

「北川潤だ」

そういえばすぐ後ろだったな。

「ランクはC。目標はクラストップになることだぜ!!」
バキッ

「ぐはっ!？」

俺の攻撃に北川が倒れる。

寝言は寝てから言えっての。

「おい……狩野」

「大丈夫です。3分経てば復活しますから」

石橋が聞いてきたからそう答えておいた。

てか実際そうだしな。

未だにあの回復力はわからん。

「そ、そうか……。じゃあ次」

「わふつ。あ、あいあむ能美クドリヤフカ。まいらんくいずDです。よろしくです。」

なんか言葉がめちゃくちゃだな。

「美坂香里。ランクはAです。目標は学年トップになることよ大きく出たな。まあAならなれないこともないがな。」

北川は無謀。

「水瀬名雪です。ランクはCで校長はわたしのお母さんですあいつも同じクラスか。」

ま、面白くなりそうだな。

全員の自己紹介が終わった。

「授業は明日からだ。明日は寝坊するなよ。特に狩野に水瀬大きなお世話だ。」

それにしても式と自己紹介だけで終わりって……。

めんどくさい1日だな……。

「狩野君、同じクラスだね」

「ん。まあ1年間よろしく」

物思いに耽っていると水瀬が話しかけてきた。

「あなたもAランクなのね」

たしか……美坂だったな。

「そうだが？」

「今度手合わせお願いできるかしら」

「香里」。いきなりすぎるよ」

ふむ。水瀬とは親友ってどこか。

「時間が空いたらな」

「楽しみにしてるわよ」

そういつて握手をする。

めんどくさいことはしたくないが、こういう奴はやらないとしつこいからな。

「ところでどこで名雪と知り合ったの？ ずいぶん親しそうだけど」

「遅刻しそうなところを乗っけてやったただけだ」

「ああ、そういうこと」

なぜか納得のいった顔の美坂。

反応を見たところ水瀬は遅刻の常習犯なんだろう。

「……なんか変なこと考えなかった？」

「ソナナコトナイゾ」

「言葉が片言よ」

……女つてのはなぜこういうことには鋭いんだろうか？

「忘れてた」

ドアのほうから声が聞こえたので見ると石橋だった。

「狩野。校長室まで来い。話があるそうだ」

……予感が的中してしまったようだ。

「なにかしたの？」

水瀬が心配そうな顔で聞いてくる。

「多分大丈夫だろ。いつてくる」

とは言え……めんどくさいことにならなければいいんだがなあ……。

コンコンッ

「失礼します」

俺が来たのは校長室。

……多分入学式のことだろうな。

俺が使ったダークホールはBランクなら扱える魔術。

しかし別の場所から魔術を返すのは話が違う。

その技術はSランク以上。

面倒なことにならないければいいがさすがに……。

「わざわざ来てもらってすいません」

「いえ……」

この人が華音学校長にしてゴールドランク『蒼の女神』……。

「手短に聞きますね」

さて、何がくるか……。

「狩野 竜牙さん。あなたAランクではありませんね」

「……どうしてそう思うんですか」

やっぱりそうか……。

なんとか白を切りとおさないと……。

「まず疑問に思ったのはダークホールです。吸収した魔術を別の場所に出すのはAランクでは無理です」

「できるかもしれないじゃないですか。ランクが低くても技術があるのはいるんでしょうし」

そこまで俺が言っていると校長はあるものを取り出した。

あれは……。

「あなたの所属するソニクライトニングの登録書です。4年前にはすでにSランクに到達してますね」

……その頃のものを処分するように言うのを忘れてた。

まさかまだあるとは思わなかったが……。

「参りました」

あれを出されたら隠し通すのは無理だしな。

「それであたの本当のランクは？」

「シルバーランク。『月の墮天使』」

もう隠すのも無意味なので正直に話す。

「あなたがあの……」

少なからず驚いているか。

一応一時期噂になっていたからな。

「それで俺をどうするつもりですか？」

ここからが本番だ。

ギルドや養成校でランクを偽るのは軽い罪となる。

除名や退学もありえるのだ。

なんとかそれだけは回避「何もしませんよ」し……？

「今なんと？」

「何もしませんよと言いましたよ」

……少なくとも退学だけは免れたみたいだ。

「まあ一つだけ条件とするなら……」

……なんだ？

「なにか事件があつたら率先していつてもらふことですかね」

……それならいくらでもいい。

「わかりました」

もちろん了承する。

「それでは明日からよろしく願いしますね」

「はい。失礼します」

俺は校長室を後にした。

（よかったな。竜牙）

アルテルムが話しかけてくる。

「まあな。あの校長でよかったよ」
明日から頑張るか。

教える立場

俺が華音校に入学して早2週間。

たまにくる依頼をこなし、学校では勉強……という名の睡眠をとる生活を送っていた。

……たまに起きて授業を受けてるから大丈夫だぞ。

そんなこんなで今は戦闘訓練の授業中。

本気を出すわけにもいかないので適当にやって終わらそうとしたのだが……。

「あの……狩野さん」

「ん？」

声がしたほうに振り向くと亜麻色の髪にマントが目立つ女の子が。

「……クドリヤフカだったか？」

「はい、そうです」

……覚えづらい。

「クドって呼んでいいか？」

「えっと……オブコース。……でよかったでしょうか」

おいしい。オブコースだ。

ま、指摘するほどでもないだろ。意味通じるし。

「それで何のようだ？」

「あ、はい。訓練に付き合ってもらいたくて」

……なぜ俺に？

「美坂に付き合ってもらえばいいだろ」

入学して最初の戦闘訓練のとき、美坂に指名されて試合をした。いきなりやるとは思わなかったが約束はしていたしな。

結果は僅差で美坂の勝利。

適当なところで隙をみせて攻撃させたというのが真実だがな。それ以来美坂に勝負を挑む者や教えを乞う者がたくさん出た。

…… ホント負けてよかった。面倒だし。

「私の武器とではかなり違いがありますし……それに」

ふと美坂のほうを見ると教えを乞う者達に囲まれていた。

あれでは聞こうにも聞けないだろう。

…… あ、ため息ついてるし。

「それで暇そうな俺に付き合ってもらおうと思ったわけだ」

「そ、そんなことないです!! 狩野さんもすばらしいです!!」

「別にいいって。事実だし」

ちよつとからかったただけだがそこまで言ってくれるとはなあ……。

それにしてもどうするかな……。

（いいんじゃないか？）

ん？ アルテルムか。

（教える側になるのも立派な訓練だぞ）

（かつてのお前のようにか？）

（……悪い）

…… っとく謝ることじゃないってのに。

（あれは俺自身が決めたことだ。気にするな）

引き摺りやがって……。

俺が心配なのはわかるんだけどな。

「あの…… それでどうでしょうか」

ん。物思いに耽ってたな。

「……いいぞ。相手をしてやる」

「っ!! ありがとうございます!!」

そこまで喜ばなくてもいいっての。

ま、頑張りますか。

教える立場ってやつを。

MWS、正式名称はマインドワールドシステム。

これは人間の精神を仮想世界、通称精神世界へと位置づけ、その中で戦闘訓練ができると言うものだ。

あくまでも仮想世界のため、その中でどれだけ鍛えても身につくことはないのが欠点ではあるが、戦略を考える点だけで見れば十分の代物。

そのMWSを起動し、精神世界に入り込んだ俺とクド。

「んじゃこい」

「わふっ！？」

わふって何だ？

（……説明しないとダメだろうが）

めんどくせえな……。

「それじゃルール……っていうほどでもないが説明するぞ」

とはいっても単純明快。

俺は攻撃をせずに防御、回避のみ。

クドは全力で攻撃するというだけのこと。

「武術、魔術、守護獣でも何でもあり。いくらでもかかってこい」
実力がどのくらいなのかわからないことには教えられないからな。

「あの、狩野さんは本当に攻撃しないんでしょうか？」

……咄嗟の判断も見たいしやっておくか。

「それじゃある程度経ったら一撃入れる。それが終了の合図な」

クドにとっては薙蛇だが、気づいていないらしくむしろ張り切っている。

……ま、いいか。

「さあいつでもこい」

「はいっ」

「いくです！ストレルカ！！」

まずは守護獣か。

大型の犬の守護獣……見た目からすると風属性か。体制を低くしてそのまま俺のほうに突進してくる。

スピードはなかなかのだから、動き回ってかく乱させるほうが効率的だと思うが……。

まあとりあえず防御するか。

二刀を十字状にしてストレルカの突進を受け止める。

「いきます！！」

クドが小刀を両手にその小柄な身体で高く跳躍し、ストレルカの上から攻撃してくる。

まだストレルカも油断できない状態だし普通ならば有効だっただろう。

俺が二刀を使わなければな。

ストレルカを抑えている二刀のうち自分のほうにある血呪を引き、クドの防御に回す。

もともと力の差は歴然のため軽々と止まる。

「これで終わりか？」

「まだです！！」

一度反動をつけ、後ろに飛んで距離を取ったクド。

同時にストレルカも自分のほうに戻したが多少隙があった。

後で指摘しておくか。

「サイクルウィンド！！」

次は魔術か。

風属性の攻撃魔術の特徴は威力は低いが同じ風じゃなければ弱まることがないことだからな。

サイクルウィンドは全方位に真空波を創り、相手を切り刻む魔術。

ダークホールなどの消滅系ならできないこともないがここは避けておくか。

「ヴェルカ!!」

「なっ!?!」

二体目の守護獣!?

小型犬らしいヴェルカは風の輪を避けている俺に向かってきた。
まだサイクルウィンドは継続してる……なら。

風が切る音と何かが衝突する音がした。

そして血が噴出していった。

「えっ……?」

クドの顔は驚きの表情。

今の俺は血呪でヴェルカの突進を受け止め、サイクルウィンドに脇腹を斬られていた。

回避に回ればまったくの無傷でできた状況。

だが俺はそれをせずに受けた。

それがクドの一瞬の隙を生んだ。

——サイクルウィンドが止んだ。

「瞬光」

その言葉でクドが気づくが既に遅い。

「あっ」

認識できないほどの速さで、短距離ながら高速移動することのできる光魔術、瞬光。

ヴェルカを置き去りにして一瞬でクドの背後に着き、爆癒を向ける。

「試合終了だ」

こうしてクドの実力を見ろという意味の試合は終わった。

MWSを切って反省会。

まあ俺がクドに欠点を指摘するだけだが。

「攻撃力不足、武器が合っていない。戦術はよかったが詰めが甘いし覚悟が足りない」

「わ、わふ……」

（言いすぎだ竜牙）

……さすがにやりすぎたか。

一つずつ説明するか。

「攻撃力不足は体格からしてしょうがないが……」

小柄なクドに攻撃力を求めるのは酷だしな。

「覚悟がないのは致命的だぞ」

「覚悟……ですか」

決定的なのは最後の場面。

わざと避けずに攻撃を受けた俺に一瞬ながら動揺していた。

そして俺はその一瞬の隙をついた。

戦いをする以上怪我をするのは当然のこと。

それに動揺するとなると自ら危機を招くことに他ならない。

……慣れるしかないんだけどな。

「次に戦術だが」

ここで気になることが一つ。

これ一つでだいぶ変わってくる。

「ヴェルカと……ストレルカだったか。同時に出すことはできるか？」

「はい。できます」

ならだいたい強くなれる要素はあるわけだ。

手数が多ければそれだけ戦術の幅も増えるし。

「最初のジャンプの一撃。ストレルカで押して動きを制限したのはよかった」

状況が状況なら一撃を入られたところだった。

「だが俺が二刀使いだったことが失敗の一つ。あれは武器が一つの相手に使う戦法だからな」

さらに改善点。

「あの状況ならさらにヴェルカで背後から攻撃するのが得策だな」
さすがに三方位の攻撃は避けづらい。

「あとは武器」

「合わないってどういうことでしょうか？」

まあそうくるわな。

「武器に振り回されているってことじゃないんだが、小刀はスピードに重点を置いているからな。打ち合うには厳しいぞ」

「それじゃあどうすれば……」

むう……そういえば。

「？」

何かを探す俺に首を傾げるクド……お、あったあった。

「これをやる」

「わっ、わわ」

クドは俺が投げた異空石を慌てて受け取った。

「中には二つで一对となつている短剣、クロスグラビティだ」

昔ダンジョンに潜った際に見つけた代物。

攻撃を加えるとそれに伴い対象の重量を増やす。

そのことを話すとそんな大事なものもらえないと言い出した。

「俺もかなりダンジョンに潜っているいろ持っているからな。別に

そのくらいいい」

「で、でも……」

「それにこれから長い付き合いになるんだ。そのプレゼント」

その言葉にクドの動きが止まる。

俺はクドを弟子として認めた。

そしてこれから教えると。

その意味を含めて言った。

「厳しいがついてこれるか？ クド」

「は、はいっ……」

こうしてクドとの師弟関係が結ばれた。

昇格試験

クドが弟子になって2ヶ月が過ぎた。

雪の街と呼ばれる華音にも夏が来ていた。

あの日以来クドは飽きもせず俺に練習を指南してくる。

受けた以上師匠としての仕事を全うするだけだが。

だがまだ依頼を受けさせたことはなく、基本と戦法を教えている。
様にはなっているがそれでも最低ランクのDだしな。

無理はさせていない。

しかしこの時期になるとそうもいつていられなくなる。

ハンターにとって大事な出来事、昇格試験が近づいてきているからだ。

カッカカッ

木のぶつかり合う音が辺りに響く。

「短剣は手数が命だ！ スピードを上げろ！」

「はい！」

カカカッカカッ

クドが両手に持つのは木でできた短剣、俺は一本の木刀。

先ほどよりクドが放つ斬撃は増えたがそれでもいなせる数。

「力で押そうとするな！ 手数で攻めろ！」

「はいっ！」

カッカカカカッカカカカカカッ

正面、左方、右方、様々な方向からの斬撃。

この数ヶ月でかなり上達はしたと思う。

そろそろ……かな。

ガキッ

「!？」

斬撃に合わせて木刀の一撃を放つとクドは後方へ飛んだ。明らかに力の違う勝負、連撃が止まればそのままやられてしまう可能性が高い。

だからこそ一度連撃が止まった場合下がったほうがいい。そう教えたのも俺。

さて、下がった後に隙を作る。

それがその教えの後の言葉。

その手段はいろいろと教えたが俺には通用しない。

クドもそれを解ってるようで間合いの外でどう出るか考えているようだ。

……さて、どう出る？

「……いくです！」

クドはそう言うのと疾風を発動し俺の周囲を走り始めた。

かく乱しようとしているようだ。がそれだけでは無理とわかっているはずだが。

「ストレルカ！」

「……数を増やしてきたか」

クドの守護獣の一匹、犬のストレルカが俺を挟んでクドと対称に走る。

ここで崩してもいいのだが、クドがどんな方法を取るのか興味があったためそのままにした。

——次の展開はすぐに訪れた。

俺の周囲を走っていたクドが攻撃を仕掛けてきた。

「やつ！」

その一撃を受けて弾き飛ばす。

同時に時間差で攻撃してきたストレルカを木刀で受け止めた……が「!？ ヴェルカか！」

クドのもう一匹の守護獣、ストレルカより一回り小さい犬ヴェルカがストレルカの後ろに隠れていた。

ヴェルカの攻撃を咄嗟に避けると体制が崩れた。

「覚悟なのです！」

その隙を突いてクドが狙ってきた。

守護獣二匹も俺に連携で攻撃してくるから木刀一本じゃ足りないな。

……仕方ない。

ガッ

「わふっ？」

「油断大敵だ」

懷に隠し持っていた短剣くらいの木刀でクドの攻撃を受け止めた。

そのことに驚いたクドの動きが一瞬止まる。

だがその隙が命取り。

「瞬光」

「あっ!？」

クドの後ろを取って木刀を突き立てて訓練終了。

「相変わらず想定外の出来事だと動きが止まるな」

「だ、だからってあれは酷いと思うです……」

ま、それはそうなんだけどな。

「木刀一本で戦うとは言ってないだろ。いつでも最悪の状況を考える。そう言っただけだ」

「うう……わかってるのですが……」

だが俺が二刀目を使わなければいけない状況になったのは事実。

たった二ヶ月でここまで来るとは……恐るべき成長だな。

いつかは俺を……いや、今は考えることではないな。

それよりも今は……。

「さて、昇格試験での戦法のおさらいだ」

いつかの未来より確実にある今を見よう。

ハンター昇格試験。

Sランクの昇格試験はダンジョンに置かれた宝を取ってくること。キーカス大陸にはほとんどないが外の大陸にはまだ未発見のダンジョンも多い。

その奥には特殊な力を持った武器など置いてあることが多くハンターの依頼とは別の仕事でもあるトレジャーハンター。

もちろんその宝を守るための罠もあり、Sランクの昇格試験はその罠を突破できるかどうかの確認でもある。

今回の俺は既にシルバーランクのため偽装しているランクを上げて八百長感覚で試験を受ければいいだけの話だが。

ちなみに俺がSランク昇格試験に挑んだときはその頃いくつかのダンジョンに潜っていた経験もあり、指定された宝が結構浅いところに設置されていたこともあり気付かずにもっと深部にあった宝を手に入れていた。

一応宝を手に入れたということで合格にはしてくれたが。

そのためSランク以上の試験は時間がかかるということで後日となっている。

今日はCからAランクへの試験で直接戦闘系。

クドの行うCランクへの昇格試験は最低ランクからの昇格ということで試験官の攻撃魔術、守護獣の禁止という制限でのMWS内での戦闘。

B、Aランクは制限が外れていくのだが今回は関係ないので割合とする。

制限があるといっても格上のBランクが相手に魔術師タイプと戦うことはないので条件的にはかなり厳しい。

まあ言っただけはないがクド自身がすでにBランク下位の实力をつけているため問題はないと思うが……。

「次！48番！」

おっ 出番だな。

「は、はいっ!!?」

勢い余って前につんのめるクド。

…… 大丈夫かよ。

わ、わふ……。

ちよつと緊張してしまいましたが本番です。

竜牙さんに教わったことを無駄にしないためにも頑張らないと。

「MWS 起動!」

MWS 内…… 精神世界ですね。

え…… フィールドはコロシウムタイプ。

試験のフィールドは毎回変わるそうです。

狩野さんの話ではいかにしてフィールドを把握し、有効活用するかがポイントだそうです。

荒野だったら岩を影にして攻撃を防いだり、森だった場合身を隠して奇襲など……。

今回のコロシウムの場合は障害物がなく移動できる範囲も決まっているため退路を残しながら移動すること。

あとは相手が遠距離武器なら足を止めないこと……でしたね。

幸い試験官の武器は大剣。

間合いさえうまく取れば大丈夫そうです。

後は……

「試験開始!!」

わ、わふっ!? まだ復習の途中ですよ!?

しかも一直線に突っ込んでくるです!

「うおおおお！」

え、えつとえつと……大剣で上段の構え、対処法は……。

「はっ！！！」

！ 真つ向から受けずに斜めに受けて剣線をずらす！

「おっ」

「疾風！」

バランスが崩れている隙に間合いを取るです。

さらに次の布石。

「ヴェルカ！」

スピードタイプのヴェルカ。

「いくですよヴェルカ」

ヴェルカは一声なくと疾走。

試験官の周囲を回るように走ります。

そして私もそれに続いてかく乱するのです。

ちょうど試験官を中心に点対称で動く私とヴェルカ。

以前ならこのまま攻撃に転じて勝負を決めに行くところですが今は狩野さんに頂いたこの武器があるのです。

クロスグラビティ。

鞘から抜いている間、刃に当たった無機物を少しだけ重くすることの出来る二つで一对の短剣。

一回に重くなる量は微々たる物ですが数を打ち込めば一キロ、十キロ……。

もつといけば持てなくなるくらいの重量になるはずですよ。

相手がその重さに耐え切れなくなつて武器を捨てようとしたときに一気に止めを！ というのが今回の作戦。

これも狩野さんが考えた作戦なんですよけどね。

所見ならほとんど引つかかるだろうって言っていました。

いつかは狩野さんと共に戦ってみたいのですがまだ方を並べられるような力には私にはないのです。

でもいつかそのときが来るように……だからここで負けるわけには

いかないのです!!

そろそろ試験官さんも攻撃に転じようとしているようですし……先にこっちからいきます!

狙いは武器である大剣。

「やあああ!!」

ふむ、最初こそ焦ったが今は落ち着いているようだ。

数回打ち合い、相手のバランスが整ったところで後方からのヴェルカの奇襲。その間に離脱を繰り返している。

クロスグラビティの効果も一回一回は薄いものなので気付かれていた様子もない。

気付く頃にはもう手遅れだろう。

まあこれなら大丈夫か。

俺は安心して見ることにした。

「はあっ!!」

「くっ」

打っては下がりの繰り返しをしてかなりの時間が経ちましたです。打った回数は数十……いえ、数百回。

「っ!」 その短剣、能力付きか!!」

最初こそ気付いてなかったようですが時間が比例して重くなっている自分の武器によろやく気付いたんでしょう。

けどもう手遅れ。

最初ほどの剣速もなく、ヴェルカなしでも避けられる程度。

……そろそろ決めるのです。

「ヴェルカ!!」

その合図と共に牽制していたヴェルカは離れ、周囲を走る。

それと同時に。

「ストレルカ!!」

大型犬のパワータイプ、ストレル力を具現化。

「二体の守護獣だ?!?」

試験官さんの驚いた声。

やっぱり珍しいんでしょうか?

でも今はかまっている暇はありません。

一人と二匹になったことでさらに対応が難しく、それもどの順番で来るのかもわからない。

狩野さんに教わらなかったらここまでの戦術は考えられなかったと思います。

その期待に応えるためにも!

「ヴェルカ! ストレルカ!」

私の合図に二匹とも頷きタイミングを合わせて飛び込む!

「ちっ!」

先に飛び出たヴェル力を横に避け、ストレル力を大剣で受け止める試験官さん。

でもこれでがら空きです!!

飛び上がって最後の一撃!

「てやあー!!」

ガキッ

わふっ!?

いつの間に短剣が……?

「備えあれば憂いなし、ということだ」

まさか狩野さんと同じ……?

「あんたはよくやったよ。俺じゃなければ合格していただろうな」

ストレル力を受け止めていた大剣が振り上げられ間合いを離された。再び跳びかかる前に自分にその大剣が振り掛かるだろう。

ここで……終わりになってしまおうですか……？

——嫌です！

自分のためにも！

私に教えてくれた竜牙さんのためにも！

絶対に勝つのです！

「エアブラスト！」

「なっ！？」

私が諦めると思ったのか魔術による突風に驚く試験官さん。

体重の軽い私はそれに身を任せて後方に飛ぶ。

振り下ろされていた大剣はその重量ゆえに止めることができずにそのまま地へと落ちる。

完全なる隙。

その隙を見逃さずに一気に踏み込んだ私は……。

「はああああ！！！」

試験官さんに止めの一撃を決めたのでした。

「やったです竜牙さん！！！」

「ああよくやった」

滅多に褒めることのない俺だが今回は褒めない訳にはいかな
いからな。

あのタイミングでしかも脚が地に着いていない状態だと対応できる
行動はほとんどない。

そこで身の軽さを逆手にとって風の魔術によって距離をとり相手が体勢を崩したところへ攻撃。

あの一瞬でそこまでのことをできるのはBランクでもほとんどないだろう。

あの短剣はそれほどまでに意表を突かれる物だったのだから。

例えば事前に俺がやった戦法だとしても。

「そつえば俺の呼び名が変わってるな。前は狩野さんだったのに」
たまたま気付いたので言ってみるとクドは少し慌てた。

「わふっ！？ と、特に深い意味はないのですが……ダメでしょうか？」

背の違いから自然と上目遣いになるその目は少し潤んでいるようにも感じた。

まあ特に気にするほどのことでもないし……。

「まあいいぞ。呼びやすいほうで呼べばいい」

「あ、ありがとうございますです！」

そこまで言われるほどのことでもないと思うんだが……。

まあとりあえずこれからの訓練はどうするかな。

はつきりいつてもう教えることはほとんどない。

あとは実戦で場数を踏むだけだ。

今回のことを考えればBランクもなんとなく取れそうだし……。

「竜牙さん？」

……そうだ。

「クド。お前に課題を与える」

「課題……ですか？」

魔術を教えるにしても属性の違うクドには教えようがない。

せいぜいその魔術の利用法くらいだ。

だがこれなら属性は関係……ないとはいえないが一番有効だろう。

俺がその昔、足掻きとして覚えて現在でもその鍛錬を怠っていない物。

「固有魔術を一つでも作ってみろ」

離別

私が昇格試験に合格してから数ヶ月が経ちましたです。

ここ華音では雪が降り始め『雪の街』の名に相応しい風景になってきました。

最も南の暖かい地方出身の私としましては厳しい季節なのですが…

…。話が逸れてしまったのです。

竜牙さんからの課題である固有魔術の作成はかなり難しいです。

まずすべての魔術の根源となっている陣術の解読。

普段私達が使用しているのは言術と軌術の二つの術式。

言術は魔術名やキーワードを唱えることにより魔術を発動する術式。攻撃や回復、補助魔術がこちらにあたります。

言葉を唱えるだけで発動するためどんな体勢でも魔術を発動できるのが特徴です。

対して軌術は、ある一定の動きをすることにより魔術を発動する術式。

幻影魔術やトラップ系の魔術がこちらにあたり、相手に魔術の発動を気付かれさせないものが軌術となっています。

この二つは術式を頭に思い描いて魔力を通すことにより、魔術を発動します。

術式は一般に公開されているため、少し勉強をして属性が合えば誰でも発動することが出来るのです。

もちろん相応の魔力が必要で足りなければ発動することはありませんが。

一方陣術は魔方阵というものが基礎となっていて、陣の形、中に書かれている古代文字やその配列。

その一つ一つ全てを理解していないと発動しません。

方術師と呼ばれる方々が使う人が独自で編み出した魔術もこちらに

あたるそうです。

守護獣の魔力によって発動させる陣術はそれぞれの魔力の質により、同じ陣でもまったく違う効果になることが多く、ほかの人から教わることが難しい術式です。

また、一般化されていないために魔術の効率化もされておらず、消費魔力が大きいという部分もあるのだそうです。

竜牙さんはその問題を解決できる方法を知っているらしいのですが、私とは属性が合わないため自分の固有魔術を教えることが出来ないそうです。

竜牙さんの固有魔術ってどんなのなんでしょうか？

ちよつと気になるのです。

そんな難しい陣術ですがメリットもあります。

一つは意表をつけるという点。

公開されている魔術とはまったく違うので、相手はどんな効果なのか予想できません。

そのため相手の対応が遅れ、隙が出来ます。

もう一つは言術、軌術への変換。

前述のとおり、元々言術と軌術の根源はこの陣術になります。

ゆえに完全に理解していれば言術、軌術への変換も可能となるわけです。

これを利用すれば既にある言術を軌術にすることもできるそうです。尤も竜牙さんはそんなことするくらいなら自分が使いやすい魔術を構築するほうがいいといっています。

今私が悩んでいるのはこの変換の部分。

陣術での発動は既に完成していて、後もうすぐなのですが問題はこの魔術の性質。

補助魔術でありながら奇襲用の魔術でもあるため、言術と軌術の両方使えるようにしたいのですがなかなかうまくいきません。

竜牙さんに聞けば何とかなるんでしょうが驚かせたいですからね。

竜牙さんから頂いた直筆の資料にも書かれているのでそれでなんと

かしないと。

……わふっ？　気がつけば竜牙さんとの朝練の時間です。

固有魔術の構築という課題はありますがそのために訓練せずに勘を鈍らせたなら本末転倒ですからね。

いつといずふおーるだうんということです。

さて、朝練の準備をして……。

「クーニヤ。ちょっといい？」

お母さんです。

ハンターとして数々の依頼をこなしていて故郷ではちょっとした有名な人ですよ。

私の一番好きな人です。

それにしても何でしょうか？　こんな朝早くに……。

「突然で悪いんだけど……実は——」

「なあ美坂。クド知らないか？」

「クドリヤフカ？　知らないけど……」

珍しいな。あいつが朝練の日に来ないなんて。

弟子になってから今まで連絡もなしにサボることなんてなかったのに。

（その朝練のたびに俺が起こしてるんだが）

あーはいはい。感謝してますよー。

（何か感情がこもってないようだが……まあいい）

「ふうー今日は間に合ったよ……」

ん？

「あら。名雪のほうが早いなんて珍しいわね」

「そうだな」

「むー酷いことってない？」

「」「そんなことないぞ（わよ）」「」

む、北川いたのか。

「ひでえ……」

「それで誰がいないの？」

「美坂」

「ああ、まだクドが来てなくなてな」

「うるさいわよ」 バキッ

「クドリヤフカちゃん？ そっいえば……」

「おい席に着け」

石橋か。

「出席取るぞ。その死体は北川か」

また美坂に殴られたか。

にしてもそれでいいのか担任？

「おっ珍しく水瀬が遅刻せずに来ているな」

「うゝみんな酷い……」

「あとは……能美がきてないのか？ 珍しい「遅れました……」お

う来たか」

ん？ 何か元気ないな。

「竜牙さん……休み時間ちよつといいですか？」

「？ かまわないが」

何なんだろう？

「よし、授業を始めるぞ」

「引越す？」

そのことをクドから聞いたのは一時間目の授業後の休み時間。

「はい……。お母さんが長期の依頼を受けてしばらく家に帰れない
そうなんです」

まあ長期の依頼ってのは結構あるからな……。

大体は強いハンターに町にいてもらって、魔獣から守ってもらっ

てのがほとんどだが。

「私は一人でも大丈夫といったんですが心配らしくて……おじ様のところに預けられることになったんです」

「……場所は？」

「……少破です」

キーカス大陸南東の街か……。

さすがにおいそれといけるような場所じゃないしな……。

「それでいついくんだ？」

「荷物の整理とかありますけど……大体一週間くらいです……」
一週間か……短いな。

それにしてもなんでこんなに落ち込んでるんだ？

ただ華音から離れたくないってわけでもなさそうだし……。

「すいません……こんな形で師弟関係を解消することになってしま
つて……」

……つたく。

「バカかお前は」

俺はおもいつきリクドの頭を叩いた。

「わ、わふっ！？」

涙目で叩かれた頭を抑えるクド。

表情から察するに何で叩かれたのかわかってないようだな……。

「いいか？　どんなに離れていてもお前は俺の弟子には変わらない
んだからな」

「で、でも！　もう会えないかもしれないですよ！？」

まだ言うか。

「どんな状態になろうとお前が俺の弟子だったことに変わりはない
だろ。お前は俺の一番弟子なんだからな。そのくらい察しろ」

「あ……はい！」

ようやくわかったかこの馬鹿弟子が。

それにしてもあと一週間か……そういえば。

「課題のほうはどうなった？」

「わふっ？ あとは変換だけですけど……」

ふむ……それなら後もう一步というところか。

……よし。

「クド。明日から朝練はなしだ」

「わふっ！？ どうしてですか！？」

話しは最後まで聞け馬鹿者。

「その代わり固有魔術を完成させて一週間後俺と勝負しろ」
それが俺に出来る最高の餞だ。

「一撃でいい。俺に攻撃を喰らわせてみるよ」

一週間後――

私が華音で過ごす最後の日。

クラスの皆さんが送別会を開いてくれました。

「本当、突然だね……」

「まだ1年も経っていないのに……」

水瀬さん……美坂さん……

「あつちにいつても頑張れよ！」

「はいです！」

北川さん……

華音で過ごした日々は短かったですけど楽しかったのです。

「そういえば竜牙の奴はどうしたんだ？」

「言われてみれば見当たらないわね……」

「あ、大丈夫です。私は知ってますから」

そう。竜牙さんはあの場所にいる。

私を待っている。

万全の状態で戦えるように。

最後に私の成長を確かめるために……。

「……きたか」

送別会の後、私が向かったのは華音校の訓練場。

竜牙さんが無理を言っただけで貸してもらったそうです。

私の目の前に立っている竜牙さん。

でも今までの雰囲気とはまったく違う戦闘者のもの。

訓練のとき手加減してくれていたのがしっかりと伝わってきます。

正直に言つと足が震えそうです……。

でも……。

「MWS。フィールドは荒野だ。異論はないな？」

「……はい」

竜牙さんこうして向かい合うのは多分これが最後。

絶対に悔いなんて残さないのです！

「MWS起動」

目の前に広がるのは所々岩がある荒れた野原。

でも私は森などではない障害物がないフィールドならなんでもよかつたのです。

私と竜牙さんの体力の差は歴然。

長期戦になれば私のほうが振りになるのは目に見えています。

だったら勝負は一瞬。

その一瞬に全てをかけるのです。

「さあ……こい」

「疾風！」

移動速度強化の魔術、疾風。

いくのです！！

一直線に俺に向かってくるクド。

俺が血牙を放つても間に合うかどうかという凄まじいスピード。

全魔力の大半を込めているのだろう。

肉体の限界にかなり近い。

ならば迎え撃つ。

確かにそのスピードで攻撃を与えればかなりの衝撃が来るだろう。

だが原理はただのスピードの突進力を加えた斬撃。

その程度なら一撃で叩き伏せる！

「てやあ！」

クドの渾身の一撃。

俺はそれを爆癒の一刀だけで受け止める。

流石に腕はしびれるがこの程度、問題にはならない。

受け止めたままもう一方の刀、血呪で薙ぎ払う。

クドは受け止められていた短剣に力を込め、反動で俺の後ろへ跳んだ。

だがそれは着地時の硬直という致命的な隙を生む。

タイミングを計り……。

「旋刃！」

——手応えがない。

二刀両方持ち、身体の軸を回転させることにより全方位へ攻撃する旋刃。

それをクドが着地するタイミングに合わせて放ったにも関わらず。

気配を感じて俺が上を見ると……。

宙を蹴り、自由自在に舞うクドの姿があった。

クドは技の後の硬直で動けない俺に向かって宙を蹴り……。

「やああああ!!」

一太刀を俺に与えた。

「……なるほどな」

竜牙さんが体勢を整えて私と向かい合った。

「大気を圧縮して一時的に足場を作りだす。攻撃性はまったくないが宙を自由に移動できるし、固有魔術にしては一発の消費魔力も少なくても済むから連続使用も可能か」

……さすがです。

たった一回見ただけでそれだけわかってしまうとは……。

「クド」

「……はいです」

「この魔術の名前は？」

そうです。

これは言術にも使用できるように既に名前は決めてあります。空を自由自在に舞うための足場……。

「スカイダンシング」

「空の踊り……か」

竜牙さんはその名を聞くと納得したように頷きました。そして改めて私に向き合っていると……。

「よくやったなクド。合格だ」

賞賛の言葉。

「りゅうが……さん……」

竜牙さんに認められた……。

褒められた……。

なんででしょう……嬉しいはずなのに涙が出てきます。

「泣くことねえだろう」

竜牙さんは苦笑まじり。

……そうですね。

いつまでも泣いているわけにはいきません。

涙を拭いて……。

「はい!!」

笑顔で答えました。

まさか本当に一撃貰うとは思わなかった。

こりゃなんか褒美でもやらないとな。

そう思つてクドに何がいいか聞いたところ……。

「あの……竜牙さんの固有魔術を見てみたいです」
と言つてきた。

……見せられるのあつたか？

「……いくつかあるがやばいのもあるぞ」

俺のその言葉にビクツと身体を震わすクド。

だが……。

「お、お願いしますです」

うゝむ……そこまで言うならいいか……。

「よし、まず手始めに補助系から」

——構成するのは隠密……

——何物も通さない漆黒の闇……

「遮断の闇、インタラクションダーク」

固有魔術発動。

辺りに闇が広がっていく。

「……わふっ？」

クドの意外そうな声。

ま、無理はないがな。

俺たちは闇の中にいるというのに互いがはっきり見える状態。

似たような魔術にダークネスワールドがあるが、そちらは完全に見えなくするもの。

これだと風景が見えないだけでまったく意味がないようにも思える。だがそれはこの闇の中に限ったこと。

「この闇の外とはほとんど干渉を受けなくな。視覚、聴覚、嗅覚などまったく外からは感じられないんだ」

出入りは自由にできるがなと補則をつけて説明する。

クドは試しに闇の外に出たり入ったり、ヴェル力を出して何も聞こえなかったりすることを確認して驚いていた。

ま、こんなもんだろ。

さて、次が問題だが……。

「次、攻撃系なんだが……覚悟はいいな？」

クドは俺の雰囲気からかなり危険だということを認識したはず。それでもしばらくすると静かに頷いた。

――裁きを下す執行者よ……

――その正義の元、かの者に裁きを下せ……

――血を生贄とし、血の運命に抗う者が命じる……

「執行者達の正義、エクスキューションーズ・ジャスティス」

俺の血が刀、血呪へと伝わりそこから虚空へと消えていく。

固有魔術……発動。

クドの身体が金縛りにあつたように拘束される。

この魔術は俺の運命を模したもの。

力を求め、血に使われる運命の俺に相応しい魔術。

この魔術だけは誰にも教えるつもりはない。

何故なら……この魔術は破滅の運命を持つ者にしか使えないのだから……。

地中から魔剣が現れ、そのままクドに切っ先を向けて止まる。

クドはこの先、俺に恐怖を抱くかもしれない。

それほどこの魔術は異質で強力。

だが俺と向かい合うつもりならこれは避けられない。

これは俺の力のたつた一部。

これに向かい合えなければ全力の俺の前には立っていることさえできないのだから……。

魔剣はクドの心臓に向かって一直線に突き刺さった。

「わふっ!？」

「ようやく起きたか」

エクスキューション・ジャスティスを喰らったクドはMWSから出た後も気絶していた。

結局目を覚ましたのは既に夜になっていた。

「あ、えっと、あの……ご迷惑をおかけしましたです……ってもうこんな時間ですか!？」

見事な慌てっぷりだ。

ま、状況を説明してやらんな。

「クドの母親なら先に少破に向かったぞ」

「わふっ?」

いつまでたつても家に戻らないクドを心配して来ていたのだった。
だが俺がソニックライトニングの一員だと知って、俺に少破まで送
るのを依頼してきた。

顔がにやけていたのが気にかかったが……。

「おかあさん……」

「ま、ともかくいくか」

「……はいです」

何故かクドは顔を真っ赤にしていた。

「さて……と。ここで別れだな」

さすがの俺でも少破は遠く、既に日が暮れていた。

荷物は最小限だったので、アルテルムに載せても十分余裕があった。

「竜牙さん……」

アルテルムに乗った俺に対し、顔を伏せていたが明らかに涙声のク
ド。

「やっぱり……離れたくありません。せつかく竜牙さんに認めても
らえたのに……」

「……エクスキューション・ジャスティスの恐怖をもろともせず
か。

その心意気は確かに嬉しい。
だが。

「親とはなれるわけにもいかないだろ」

クドの家族は華音にはいない。

すなわち一人暮らしとなるのだが、俺にはクドに一人暮らしは厳し
いと思っていた。

「……お前は俺の一番弟子なんだ。呼べばいつでも駆けつけてやる。そのとき俺を幻滅させるなよ」

しばらくそのままでいたがクドは顔を上げて笑顔を見せた。
涙残るその笑顔で。

「……絶対強くなるです。竜牙さんがびつくりするくらい強く……」

「……ああ」

その言葉だけを残し、俺は飛び立った。

俺の今いるべき場所、華音へ……。

——絶対、びつくりさせてみせるです

——私の……大好きな人

運命交わりし時

季節は流れて春。

雪の町と呼ばれる華音の雪も解けた頃。

順調に進学した俺は華音校二年生となっていた。

クドが少破にいつてから俺の生活は前に戻っていた。

まあ新たに弟子を取ろうとも思わなかったしな。

学校に行き、たまに依頼をこなす日々を過ごしていた。

普段どおり、あり大抵にいえば平和な時間が続いた。

——そんな状況が崩れたのは夏も迫った6月20日……。

「狩野竜牙さん。校長室まで来てください」

校内放送。

珍しいな……。

確かにあの校長が依頼するときにはよく呼ばれるが、それは担任を通してのもの。

こうして放送で呼ばれることはなかった。

（緊急のことかもしれないな）

（どうだか……）

アルテルムの問いにそう気楽答えるも、何か嫌な予感が俺にはあった。

「わざわざすいません。狩野さん」

華音校校長、水瀬秋子。

華音に常駐しているゴールドランクで、二つ名は『蒼の女神』。

「別にいい。今回も依頼なんでしょう」

入学式のときに俺が『月の墮天使』ということがばれてから、たまにこの人直々に依頼を受けたりしていた。

クドを弟子にした後もあったが、今より少なかった気もする。

……知ってたな？

「ええ、今回は緊急だったので放送で呼ばせてもらいましたが……」

……嫌な予感が当たってしまったか。

「それで？ 依頼内容とは……」

「……今日未明、巨大な黒い鯨の魔獣が現れました。強力過ぎて並のハンターではまったく歯がたたないそうです」

黒……。

鯨の魔獣がか？

「場所はキーカス大陸南東、少破の郊外です」

少破……だと？

クドがいる場所じゃないか……。

「その魔獣は周囲を破壊しながら町の中心部へと向かっているそうです。……狩野さんこの魔獣の殲滅依頼、受けてもらえますか？」

「んなもん依頼とかどうとかじゃなくいつてやる！！」

俺はそれだけを言っただけで華音校を飛び出した。

「いくぞアルテルム！」

すぐに俺の守護獣、黒竜アルテルムを具現化。

その背に乗る。

「竜牙……その魔獣だが」

「わかっている」

何か言いたげなアルテルムの言葉を遮る。

俺にもわかってる。

その鯨の魔獣が……俺の運命に関係するもの。

その力の強大さを。

それでも行かねばならない。

約束したのだから……。

「……わかった」

アルテルムはそれだけを言うと大空へと飛び立った。

「くっ!？」

「きゃあ!!!」

な、なんなんですかあの巨大な鮫の魔獣は!？

身体が大きすぎて普通の攻撃じゃ効かないし、スカイダンシングでかく乱するのが限界です。

「大丈夫ですかあやさん？」

「え、ええ……なんとか……」

両手にマガジン式の銃を持った女の人、朱鷺戸あやさんが瓦礫を押しつけて返事を返してくれました。

なんとか進行は抑えているんですけど……。

「この方向……学校に向かっているわよね……」

そうなんです……。

あの方向には私が今行っている学校があるのです。

ほとんどの生徒が一般人で数名がハンターという混同の学校。

そこには直枝さんや鈴さん、小毬さんに三枝さんに西園さん来ヶ谷さん、恭介さんに井ノ原さん宮沢さん、リトルバスターズのみなさんがいます。

これ以上進ませるわけにはいけないんですけど……力に差があります……。

「グオオオオ!!」

「「なっ!?!」」

進行が早まった!？

「このお！！ 止まりなさいよ！！」

あやさんが銃を連射しますが、敵の皮膚が硬すぎてまったく通る気配がありません。

私の風魔術も徹るとは思えないけど……。

「スパイラルウィンド！！」

風の輪を敵にぶつける。

巨大ゆえに当たることは当たるのだけれど、気にした様子もない。

「学校が！！」

あやさんの声でそちらを向くとある建物。

学校！！

まずいです！ あそこにはまだみんなが！！

「ヴェルカ！ ストレルカ！！」

私の指示に従って魔獣に向かっていくヴェルカとストレルカ。

私とあやさんも魔獣の前に立ってなんとかして足止めを！！

ブウンツ！！

がつ！？

鯨の尾が……私達もろとも校舎を破壊して……。

ダメです……他には戦える人がいないのに……。

私が……戦わないと……。

……目の前が……暗くなって……。

たすけて……ください……です……。

「りゅうが……さん……」

あ……ダメ……鯨の尾が……追撃を加えるように私に向かって……。

ガキンツ！！

「呼んだか？ クド」

この声は……りゅうがさん……。
よかった……。

それを最後に私は意識を失いました。

間一髪だな。

クドと……朱鷺戸か？

ここにいたのか……。

前に依頼で重なっただけの仲だったが。

意識を失っているが奇跡的に命に別状はなさそうだな。

さて……後はこの鯨だが……。

「でてこい。いるんだろ？」

俺のその言葉に現れる男が一人。

見ただけで狂気に包まれているのがわかる。

「よくわかったなあ。他の奴はこいつの相手で守護獣だってまっ
たく気付かなかったのによあ」

へらへらと笑いながらそういう男。

完全に染まってしまっているな……。

「……ん？」

……何かに気付いたようだな。

「ヒヤハハハハ！！ お前も同じか！！」

ある事実に気付き馬鹿笑いするその男。
はつきりいつて虫唾が走る。

だがこいつが言っていることは事実。

このクソ野郎と同じ、呪われた血を持つ者。

——あれは俺が生まれた頃まで遡る……。

俺が生まれた狩野家はハンターの世界では名門である。

とはいっても裏の名門であり、そのことを知っているのはハンターランクの最高レベルであるマスターランクでも、一部の者しか知らない。

狩野家の持つ強大な権力で情報を抑えているのである。

その狩野家が持つ力は守護獣。

狩野家の血を持つ者は、代々五神の化身を守護獣とする一族なのである。

五神とはキーカス大陸の五大都市の地を守るとされている五体の魔獣。

北の華音に玄武、東の初音に青竜、南の江亜に朱雀、西の尾根に白虎、中央の蔵等に麒麟がいるとされている。

五神は、普通の魔獣とは比べ物にならないほどの力を秘めているとされている。

魔獣でありながら人間に敵対することもないのが幸いである。

積極的に友好関係をとるわけでもないようではあるが。

狩野家の現当主であり俺の親父、狩野武は玄武の化身を守護獣としていて、マスターランクでもあり『強固なる壁』の二つ名を持っている。

母親である狩野保奈美も現役こそ退いたものの、白虎の化身を守護

獣として活躍していたらしい。

そんな両親から生まれた俺だったが……何の守護獣も宿してなかった。

五神の化身でない守護獣を宿す者もいたが、俺はそれ以前の問題。両親はそんな俺でも育ててくれていたが、問題は一族の古参の爺たちだった。

五神の化身どころか何の守護獣も宿さなかった俺を、狩野家の恥晒しと笑い蔑んだ。

俺はそんな奴らを見返すために一心不乱に努力し続けた。

力となる物は何でも学んだ。

習得することはできなかったが、守護獣なしで使える魔術、方術も学んだ。

剣、槍、斧、鞭、銃……。

様々な武器を扱っていた過程で、俺自身にある能力があることに気付く。

どんな武器でもすぐに理解し、使いこなすことが出来るというものだった。

俺はそれを武器の脳、アサルターブレインと呼び、そんな能力がある俺自身に喜んだ。

だがその喜びはすぐに終わる。

アサルターブレインには、ある致命的な弱点があった。

どんな武器でも、使いこなせる代わりに極めることが出来ない。

経験こそ積もるものの、その武器を扱う技術がまったく向上しないのだ。

例として言えば、達人と一人前の違いである。

一般的にその物を使いこなせば一人前。

その物を最大限に極めれば達人と呼ばれる。

つまり同じ物では一人前が達人に勝つことは到底不可能である。

ゆえに一人前止まりの俺では達人に勝つことは出来ない。

今俺が『月の堕天使』となっているのは、ただ長年の経験で成り立

っていること。

血呪、爆癒、そしてもう一つに絞ってに扱うことでその経験をさらに鋭くした。

今現在でもそんな支えのない建物の上に成り立っているようなもの。守護獣のいない当時の俺が、五神の化身を宿すものに勝てないのは当然のことだった。

俺の狩野家での立場が決定的になったのは俺が生まれてから3年後。両親の第二子、翼が生まれた。

翼は俺と違い、守護獣を宿していた。

それも五神の一つ、朱雀の化身を宿して。

俺はさらに努力を重ねたが、まったく力の差は埋まる気配がなかった。

そして俺が6歳になったとき、ある決心をした。

「家を出る？」

「うん」

俺が思い立ったのは狩野家を出ることだった。

「何を遠慮している？ 別に俺のことは……」

「あの老いぼれたたちが何を言っているのかは知っているよ」

親父は俺の言葉で言葉を噤んだ。

翼が生まれたことで俺が不必要だと老いぼれたちは思っているようだ。

それを庇っていることで親父の立場が危うくなっていることは、当時の俺にもわかっていた。

いや、俺だったからこそだろう。

あのクソジジイどもの嫌味を一番聞いていたのは俺だったのだから。

「今まで育ててくれたのは感謝しているよ。でもこれ以上親父に迷惑をかけるわけにはいかない」

今思えば自分ながら子供らしくない子供だったと思う。

だが当時はそれが一番だと思っていた。

今でもその思いは変わらない。

「そう……か」

そういうと親父は物置に入っていった。

しばらくすると黒い鞆に納まった刀を手に持って出てくる。

そしてそれを俺に手渡した。

「これは？」

「せめてもの餞別だ。銘は血呪。リスクはあるが遠距離攻撃が出来る代物だ。どう使うかはお前が決める」

「……ありがとう」

俺は簡単な荷物だけをまとめて家を出た。

俺の孤独な旅が始まった。

ただ一刀、血呪を道連れに。

その刀の銘のとおり呪われた運命が待ち受けてるとも知らずに……。

それからの日々は大変の一言だった。

一人で旅をするには年齢が若すぎた。

戦闘以外の知識はそれほど多くなかったので、試行錯誤の連続。

最もまずかったのは金銭面。

正式にハンターの登録をしていなかったのはまずかった。

居住地の変更に對する任務地登録には金はいらないが新規登録、

昇格試験などは前もって金が必要。

一人旅をする以上一番融通の利くハンターという職は絶対不可欠だった。

その新規登録のため、資金の大半を失った。
そうして受けられた依頼はその日の生活費より多少多いくらいの額。
年齢とランクの低さが災いして、そこまでしか稼ぐことが出来なかった。

もちろん仕事をする以上武装の補充などで金は減る一方。
そこで俺が考えたのは遺跡探索。

古き時代の遺産には特殊な能力を持つ武器がある。
幸い遺跡探索には許可などいらぬ。

人々の共同財産ということになっている。

そのため遺跡内で発掘したものはその発掘者のものとなる。

だがそう簡単に遺産がみつかるはずはない。

様々な罠がありさらには魔獣の棲家となっているのだ。

知識と実力、両方とも必要。

俺には年齢こそ若いもののそれなりの実力と知識は持っている。

遺跡の遺産を売ればそれなりの金になるはずだ。

俺が使えると思えば手元においておけばいい。

そんな考えの下俺は遺跡探索を始めるのだった。

結論から言えば遺跡探索は成功だった。

金も貯まり武器も充実。

剣、刀、槍、銃、戟……。

アサルトブレインの能力で様々な武器を使えるため、持っていて損はなかった。

今の主要武器の一つ、爆癒を手に入れたのもこの頃だった。

だがそれなりの代償が必要だったことも事実。

だがそれなりの代償もあった。

様々な罠。

矢が放たれたり槍が降ってきたりするの普通。

遺跡の最深部にある宝を取った瞬間に、遺跡が崩れ始めたこともあった。

さらには強力な魔獣。

石の巨人の魔獣、ゴーレムや鎧の魔獣、デュラハンなど上位のハンターでも苦戦するほどの魔獣の群れが襲い掛かってきたこともあった。

何度死に掛けたことがあったか覚えていない。

だがそのおかげで自分だけで修行する以上の効果はあった。

俺の運命が分岐したのはそんなときだった……。

「ふう……今回はあんまいいのはなかったな……」

一人旅を始めてから三年の月日が経ち、だいぶ遺跡探索にも慣れていた。

トラップ、隠し通路、魔獣の気配まで測れるようにもなった。

だがさすがにデュラハンを相手に無傷で戦うことは出来ずにいた。

Aランクハンターでも群れを相手にするとかかなり苦戦するデュラハン。

守護獣の持たない俺が勝つにはあまりにも大きな壁。

そのアドバンテージを埋めないわけには……。

「……ん？」

異常なほど強い気配を近くから感じた。

しかし同時に変な感じもする。

離れているにも関わらず恐怖を抱くくらいに禍々しい気配を感じるのに、弱っているようにも思える。

その異様さに逆に興味を持った俺はその気配に向かっていった。

「なっ!？」

そこにいたのは……。

「グッ……何だお前は……」

苦しそうにもがく漆黒の竜の姿があった。

もがき苦しむ漆黒の竜。

あまりにも強力な力を感じるにも関わらず、その姿は弱々しい。

「何だっというんだ……?」

「人間……か……グオオオオ!？」

「お、おいつ?」

突然苦しみ始めた竜。

外傷が見当たらず、何故苦しんでいるのかもわからない。

「ハア……ハア……遠くまで離れる……ここ周辺一帯が消えるぞ……」

「……なんでだ?」

竜の言葉は俄かには信じられなかった。

どんな状態になればこんな強力な力を感じる竜が苦しむのか。

そして周辺一帯がどうやって消えるのか。

「……知リたそうだな? 長くなるぞ」

「いいさ。今この疑問を残したくない」

竜はまだ息が荒いながらも少し落ち着いたので説明を始めた。

古き時代、人間が言う旧時代に当たる守護獣という概念がない時代まで話は遡る。

最も有名なある英雄の物語、その敵となる存在である闇の炎竜。その炎竜は力を求めるあまりに禁固とされている力に手を出した。

それは確かにその炎竜に力を与えたが、時間とともに自我を崩壊させていった。

その結果、世界を崩壊の危機に晒した。
崩壊そのものは翼の英雄に防がれたものの、世界に与えた影響は凄まじいものだった。

だがこの話はこれでは終わらない。

その炎竜の血は現代でも受け継がれている。

魔獣、守護獣問わずに不規則に受け継がれていく。

その血を受け継いだ者は強力な力を持つかわりに自我が崩壊し、辺り一帯を草一本も生えない死の土地にする。

守護獣の場合は多少は保つものの、主となる人間にもその力が受け継がれ、いずれは暴走する。

そして自分はその血を受け継ぐ者。

まだ自我は保っているものの、その自我が崩壊するまでそれほどの時間はかからない。

「だから離れる……ずっと遠くに……」

そう説明するその竜に俺は尊敬を抱いた。

呪われた運命にありながら自分より下である人間を気遣うその思い俺の勘違いかもしれないが、それでも離れるといってくれたのだ。

普通なら何の説明もせずに突き放すところ。

「お前……生きたいか？」

「なん……だと？」

「生きたいかと聞いているんだ」

俺は……。

「そんなの……当たり前だろ……」

「なら……」

こいつの運命に付き合ってもいいと思った。

「俺と契約しろ。守護獣の契約を」

「……本気か？」

俺の言葉を疑ったのか漆黒の竜はそんなことを聞いてきた。
確かに普通ならそんなことは言わないだろう。

力は得ることは出来る。

だがその先に待つのは確実な破滅。

つまりは死。

いや、死よりも酷いことだろう。

自分の意思とは無関係に周囲を破壊しつくす。

誰も選ばないだろうそんな人生。

「俺は力が必要なんだよ」

だが俺は違う。

「俺は一族から力がないという理由で追い出された。そいつらを見返すためにその力が必要だ」

「それだけの理由で……破滅への道を選ぶのか？」

そんなもの……。

「押さえ込めばいいだけだろ」

「何？」

「暴走を抑えたっていう前例がないだけであって可能性は0ではないんだろ？ だったら俺がその最初の一人になってやるさ」

物事に絶対などない。

ならばそれにかけるのみ。

ほんの少しの可能性でもあればそれにかけてやる。

「……いいだろう。気に入った」

竜は伏せていた身体を起こしながらそう言った。

そして儀式が始まる。

これから一生をともに生きる契約。

守護獣契約。

「俺は狩野竜牙。お前と運命を共にする者」

「我が名はアルテルム。狩野竜牙と運命をともにする者」

「我、この者を戦友として一生を共にすることを認める」

こうしてアルテルムは俺の守護獣となったのだ。

「はあ！」

「グオオッ！」

「ぎやははははー!!」

血の刃、白き爆発、漆黒の炎、破壊の息吹。

様々なものが交錯する戦場。

少破校は建物そのものはかなりの被害を被っていたが、人がいるところには広がっていない。

まあ俺がなんとか誘導しているんだが……さすがに限界だな。そろそろ……。

「ガアアアア!!」

鯨の口から強力な力を持つ光が収束していった。

「ちっ……時間をかけすぎだな」

学校に気がいき過ぎていた。

鯨が収束させている魔力は今までと段違いに大きい。

今までが針で刺す程度だと例えると、今収束しているのはハンマーで思いつき殴られるほどの力の差。

そのまま放たれれば文字通り辺り一帯が焦土と化すだろう。

……どうする？

ダークネスデューサピュレス……ダメだ。消失させることのできる範囲が狭すぎる。

イノセントノヴァで相殺……いや、出来たところで魔力自体は抑えられないし手足したらイノセントノヴァごと飲み込まれる。

ダークホール……今の魔力でどれだけ穴を広げられるかわからんが現状では一番最善か……。

作戦を定めて現在の全魔力でダークホールを発動させようと構えた。
——次の瞬間。

ピキッ……

目の前に広がる光景にひびが入った。
そして……。

パキィイイン……

ガラスのように割れて崩れた。

「ヒヤハハ……ハハ……ハ？」

精神がいかれているはずの男が驚いていた。

かくいう俺も同じ。

目の前に広がる光景はひびが入り割れる前と同じ。
ただ一つ。

鯨の口に収束していた魔力が消えていることを除けば。

あとで知ったことだがこの現象はリトルバスターズのメンバーの一人、直枝理樹がそのとき守護獣が覚醒して初めて発動させた魔術『ベインドリームス』によるものだった。

起こった現象そのものをなかったことにする直枝の特殊属性、『夢』の唯一にして最強の消失系固有魔術。

全魔力を消費し、直枝本人が一日以上強制的に眠りに入るというデメリットがあるが、それ以上に強力な魔術。

どんなに強力な魔術でも発動自体がなかったことになってしまえば何の意味もない。

さらに瀕死の重傷を負ってもそれをなかったことに出来、ある意味神の領域といっても過言ではないだろう。

さすがに時間が経ってしまえばどうしようもないが。

直枝の力なしでは学校どころか、辺り一面が焦土と化して誰一人生き残ることが出来なかったかもしれない。

「……よくわからんが脅威は消えたようだな」

あれだけの魔力を再び溜めるのはかなりの時間が必要。

さっきのは尾で攻撃しているときから溜めていたのだろう。

ならこの隙に終わらせる……！

「7割……解放」

呪われた血の『力』を解放すると同時に俺の保有する魔力が段違いに上がる。

「なんだ……それは……」

男の表情に驚愕と怯えが見え始めた。

それもそのはず。

今俺が内包している魔力は男自身の守護獣を上回っていたのだから。鯨が俺に対してその巨大な尾を振り下ろして攻撃してくるが……。

「無駄だ」

俺はそれを片手で受け止めた。

『力』は魔力だけでなく身体能力をも大幅に向上させる。

ひとたび解放すれば状況は圧倒的に覆るそんな能力。

男の守護獣が持っていたのはその一部だけだろう。

つまり完全な継承者ではない。

そうでなければ『力』の暴走状態、10割以上の力を出している男の守護獣に俺が勝てるわけがないのだから。

俺は止めを刺すために鯨の尾を掴んだまま、一つの異空石を取り出す。

今から放つ技は血呪や爆癒では耐え切れずに折れてしまう。

『力』の解放で向上した身体能力をフルに使い、たった一振りに膨大な魔力のすべてを込めて放つ一撃。

そんな技に耐え切れるのは俺の持つ武器でもただ一つ。

「月夜」

俺の身長を遙かに越える3mの漆黒の大剣。

切っ先だけが白くなっている闇夜に浮かぶ月を想わせる。

俺はその月夜を片手で振り上げ、すべての魔力を込める。

そして……。

「断月」

どんな攻撃も効かなかったその皮膚を紙の様に真つ二つに斬り裂いた。

「……これで終わりか」

俺の放った断月は鯨もろとも男自身も斬っていた。

今でこそ喋っているが首から下の右半身がほとんどなく完全に致命傷。

最高の回復魔術であるセクリッドサンクチュアリでも無理だろう。数分ほどで息絶えるそんな状態。

まだ息があること自体が奇跡なくらいだ。

「血の継承者……名前は？」

「竜牙だ。狩野竜牙」

何か喋るつもりらしい。

いまさらこいつが何か出来るわけでもない。

なら遺言として最後まで聞いてやろう。

「わかるか？ 自分が自分でなくなっていく感じが……。『力』を使っても使わなくても少しずつそんな感覚に冒されていく……」

そう。この『力』は万能ではない。

血を持つだけでその影響は徐々に進行し、解放すればその侵食は加速する諸刃の剣。

そしてその結末は……。

「そしてこのさまだ。自我は崩壊し自身を含めて破壊の限りを尽くす戦闘マシーンに成り下がる」

「お前……」

自我が……？

「はっ……今頃戻っても助からないのは百も承知だ。人として死ぬだけありがたいさ」

そろそろ限界なのだろう。

男の息が上がってきた。

「そろそろ……だな。……竜牙……先にあの世で……まって……いる……ぞ……」

そう最後の言葉を残し、男は息絶えた。

……多分、俺もこいつと同じ道を歩むことになるだろう。
この血を受け継ぐ以上それはかなり可能性は高い。

だが俺は抗い続ける。
世界に絶対はない。
そう信じ続けて……。

エピソード 黒き竜騎士の進む道

「そうですか。お疲れ様です」

「俺はやりたいことをやっただけだ」

少破で起こった事件の影響がある程度終息した後、俺は報告のため華音に戻ってきていた。

依頼として受けなかったとはいえ、情報元である校長には報告したほうがいいと思ったからだ。

あのとき放送で呼び出されていなければ、確実に手遅れになっていたからな。

「それにしても何が原因なんでしょうか？ 上位種族ではなかったようですし」

上位種族とは有名なウンディーネなどの上級精霊を含む、種族全体が強力な力を持つ種族のこと。

アルテルムなどの竜種もこの上位種族に入る。

海種に属し、比較的能力の高い幻獣でもないはずの鯨の魔獣が、何故そこまでの力を持ったのか不思議なのだろう。

「さあな。俺は魔獣を倒したただけだ」

話すつもりはない。

これは俺が背負うべき問題なのだから。

——俺はあの鯨の主である男のことを話していない。

あの事件は何人かのハンターの死者は出したが民間人、学校関係者には一人の被害も出していなかった。

俺はそのハンターの死者の一人としてあの男を弔った。

事件の原因となった人物ではあるが、それは呪われた血による影響。だからこそあの鯨を守護獣ではなく魔獣と称した。

最後は自我を取り戻し、人として死んでいったのだから……。

「それで一つ相談……」

俺はそこまで言いかけて言葉を止めた。

校長が二枚の紙を取り出していたからだ。

「……はっ」

紙の内容を見てさすがに驚いた。

この人はどこまで俺の考えをわかっているんだか……。

俺はその紙に一筆書いて校長室を出た。

俺が書いたのは休学届け……そして

「あつ 竜牙さん！」

「ようクド。身体のはうは平気か？」

「だー、だー♪」

俺は再び少破を訪れた。

クド達の見舞いという意味もあったが。

「はあ……まさかあんたが能美さんの師匠だったとはね」

「不満か？」

「うっん。ちよつと納得」

朱鷺戸が俺の問いに頷く。

まあ依頼であったときに側で俺の力を目の当たりにしていたからな。
「ちよつとクド公！ その人誰なのさ！？」

同じリトルバスターズのメンバーであるクドと朱鷺戸が、親しげに話すのが気になったのだろう。

特徴的なツィーテルの少女がクドに聞いた。

「そうだね。あやちゃん、紹介してくれないかな？」

メンバーの中でも一番普通そうな少年も朱鷺戸に聞く。

「お姉さんも聞きたいぞ」

「そうね。興味あるわね」

他にも数人続き、リトルバスターズ全員が頷く。

「えつと……この人は」

「待てクド。俺から説明する」

ちよつといい。

このリトルバスターズ、元々ハンターの者を含め事件をきっかけに全員が守護獣を覚醒させた。

「クドがこつちに越してくる前の学校、華音校でのクラスメイト兼、戦闘技術の師匠」

しかしこの少破校はハンター育成の設備が乏しい。

それもそのはずでハンター専門として作られた学校ではないのだから。

そのため……。

「そしてこのたび、長期依頼によりハンター育成の指導を行うことになった」

俺のランクを知っている朱鷺戸もいることだしいまさら隠す必要もない。

だから本来の自分の素性を明かすことにする。

「シルバーランク『月の墮天使』、狩野竜牙だ」

朱鷺戸以外全員驚きの顔。

それもそうだろう。

シルバーランクだけでの知名度で言えば、TOP3のシルバートラ
イデントの次に高い。

そんな人物が自分達を指導をするのだ。

その中でも弟子であるクドの驚きは凄まじいだろう。

師匠である俺がそんな有名だったとは思いつたただらうから。
さて、これから面白くなりそうだ。

こうして狩野竜牙は、しばらく少破校でハンターとしての指導を行
うことになる。

だが彼の身体に流れる呪われた血は少しずつ彼自身を蝕んでいく。

彼が進む呪われし運命……。

その行き着く先に待つものは……。

書きたいことを書くだけのあとがき

『継承される運命』これにて完結です。

短い作品ではありませんでしたがどうだったでしょうか？

感想などもらえると嬉しいです。

さて、中途半端で終わりましたがこれには理由があります。

実はこの『継承される運命』は別の二次創作作品の番外編として作られたものなんです。

北川や名雪、香里など登場しているにもかかわらず、『継承される運命』内での出番がないのはそのためです。

そのキャラクター達の中でオリジナルキャラであり、特殊な位置付けであるのがここでの主役、狩野竜牙なのです。

ちなみに元となった二次創作作品は公開する予定はありません。

執筆が完全に停滞しており、その作品を続ける意欲もなくなっているためです。

さて、狩野竜牙ですがこのキャラは別の作品でも使います。

二次創作ではありませんけどね。

しばらくしてから公開していく予定です。

ともかく『継承される運命』はこれにて終了です。

この作品で自分、黒焰の作品を読まなくなる人も、これ以降も読んでくださる人も今回はこれにて。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3541o/>

継承される運命

2010年11月6日11時08分発行